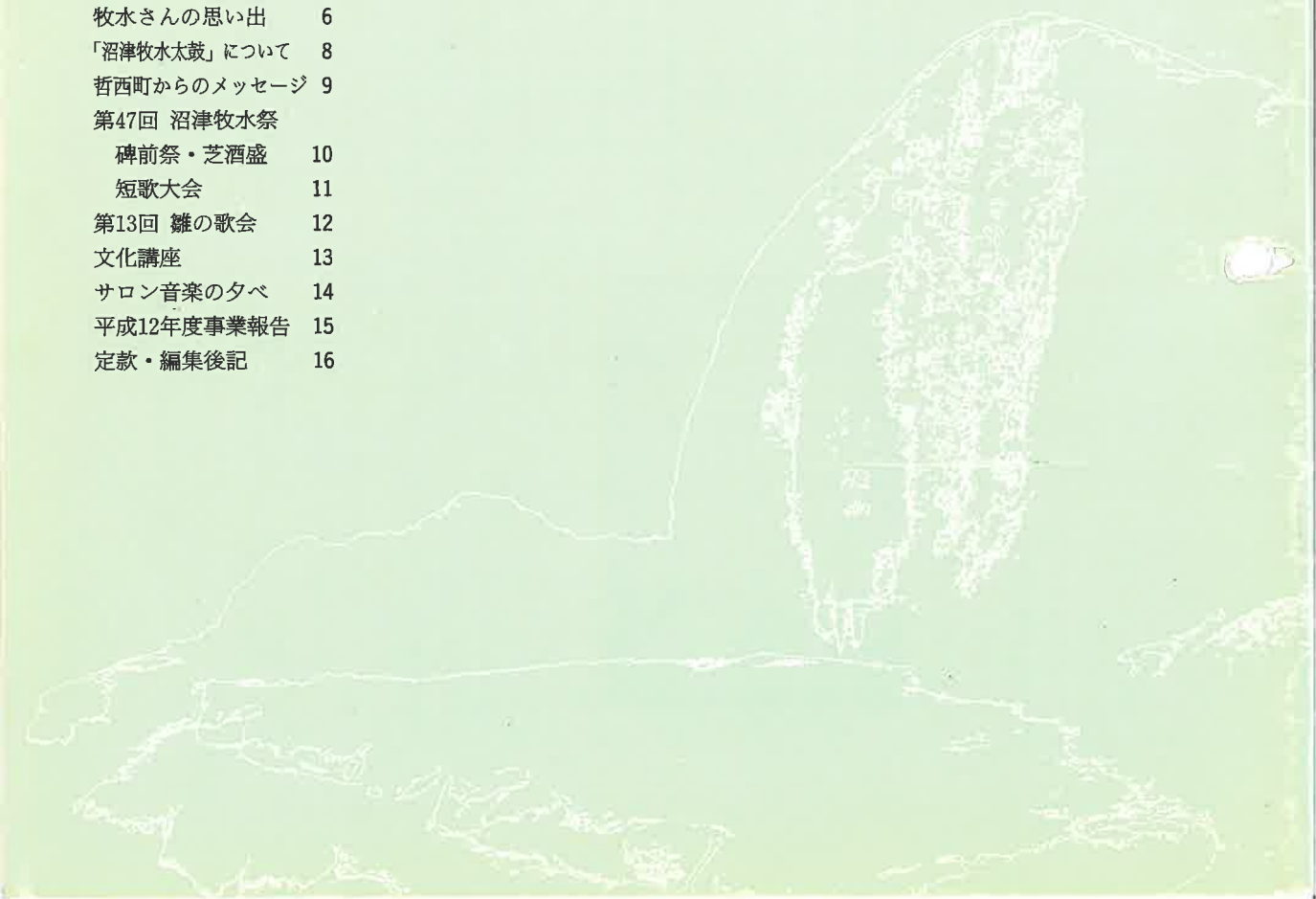
緑山河

第14号

平成13年5月25日
発　行
社団法人 沼津牧水会

目　次

旅の者になる成り方　2
裾野と牧水・喜志子・秋灯　4
牧水さんの思い出　6
「沼津牧水太鼓」について　8
哲西町からのメッセージ　9
第47回 沼津牧水祭
　碑前祭・芝酒盛　10
　短歌大会　11
第13回 雛の歌会　12
文化講座　13
サロン音楽の夕べ　14
平成12年度事業報告　15
定款・編集後記　16



旅の者になる成り方

佐佐木　幸綱
（歌人　早稲田大学教授）

大野原からのぞむ富士山（提供：裾野市）

牧水は、猛烈な雨の中を、前かがみになってひたすら歩いていた。急いでいた。手にもった洋傘からしずくが漏りはじめる。わらじの足はもちろん、羽織の袖も裾もびしょぬれだ。もう二時間以上こうして歩いている。

大正九（一九二〇）年十月九日、数え年三十六歳の牧水。午後二時半に御殿場から歩きはじめ、富士山の裾野を通って日暮れまでに須山に着こうとしている。手元の資料では大正期の道路のことはよく分からないが、自衛隊の東富士演習場の中をつっきる国道四六九号線を歩いたと思われる。現在でもまったく人家はない。広大な一面の薄の原である。そんな風景の中を、前かがみの牧水が雨中を急ぐ。

書庫が満杯になったので、第二書庫を作ろう。二匹の犬が年老いないうちに、野山を散歩させてやりたい。そんなモチーフで山荘を手に入れた。富士山麓の十里木高原である。世田谷区の我が家から東名高速で御殿場へ。御殿場インターから牧水の歩いたのと同じ道を通って須山へ。須山から十里木は近い。そんな事情があって、最近は幾度もこの牧水が歩いた道を通る。たまたま雨の日に車を走らせたりすると、前かがみで急ぐ牧水の姿が心をよぎる。

静かなる旅を行きつゝ

この話が出ているのは「富士裾野の三日」という『静かなる旅を行きつゝ』収録のエッセイである。御殿場・須山の距離を牧水は四里と書いている。じっさいは十キロちょっとだろうが、雨中を歩くとなると大変だ。砲兵連隊専用の道路だから、大砲をひく車輪で一

尺以上の深さに二本、轍が掘られた泥道である。晩秋である。そうとう早足でないと日が暮れてしまう。ときどき騎馬の兵とすれちがうだけ。周辺に人家はない。寒い。

何か用事があるのでは全くない。行かなければならない理由はまったくない。そのまま家に帰ってもいい。だが行く。どんな雨でも、どんな道でもとにかくゆく。雨が晴れるのを待って今夜御殿場に泊まることもできた。しかしそれは「本意ではなかった」と書く。

牧水が沼津の香貫山のふもとに移住したのはこの年の八月だった。

駿河なる沼津より見れば富士が嶺(ね)の前に
垣なせる愛鷹(あしたか)の山

歌のように、家から見ると愛鷹山を手前にして富士山が見える。この二つの山はつながっているように家からは見えるがそうではない。愛鷹山と富士山の間に十里四方の広大な野原が広がっているという。十里木である。そこに行ってみたい。越してきてからずっとそう思ってきた。この日、急に思い立った。

「一心に唯だこの野の奥へ行き度い心になつてゐた」

雨の中を歩きつづける理由はこれだけだった。どんなにぬれても帰らない。明日もまた雨かもしれないが、それでも行く。

好奇心・情熱・執着……。牧水をそれでも行かせた力は何だったのか。西行の「浮かれ心」、芭蕉の「草庵に暫く居ては打ちやぶり」の衝動を継ぐ何かだったか。

大正初め頃の須山登山道と清水館（提供：裾野市立富士山資料館）

この日、暗くなって須山の清水館という宿屋に着き一泊。翌朝は嘘のように晴れる。牧水は早起きである。朝、十里木へと宿を出発する。「尻端折に草鞋ばき洋傘一本を手に提げて宿屋を出かけた私の姿は昨日自宅の門を出た時と同じであつたが、心はもうすつかり旅の者になりきつてゐた」。

この一節がポイントである。びしょぬれになって前のめりで歩きつづけたのは、〈旅の者〉になりたかったからなのだ。努力して〈旅の者〉になる。〈旅の者〉になろうとする意志をつらぬき通す。つまり旅は日常と地続きではない。生活者が〈旅の者〉に成るにはあるハードルを越さねばならない。「心はもうすつかり旅の者になりきつてゐた」という何でもないこのフレーズに、牧水がこめようとしていた思いの深さを私は読みたい。

この小さな旅のその後が気になる読者もおありだろう。

須山から十里木までは二里。十里木の茶店の老婆に頼み込んでその日の宿を確保し、荷物を預けて富士山がよく見える薄原で一日をすごす。鶉のなく広大な十里木の原で（現在の「忠ちゃん牧場」のあたりか）、真っ裸の富士山を一日ながめて夕方まで。夜は茶屋に来た客の男等とともに痛飲して前後不覚。寝床にかつぎこまれ、〈旅の者〉ならではの一夜を過ごすのであった。

裾野と牧水・喜志子・秋灯

裾野牧水を語る会　芹沢充寛

昭和四年九月二十日、裾野の住人、鈴木秋灯あてに若山喜志子から一通の手紙が届いた。

秋ですね。憂鬱な秋です。白萩が美しく咲くけれど痛いこと…あなたの明るい話をきいていると元気がたちまち出ます。やっぱりあなたは私にはなくてはならない友です。すそのにゆきたいけれど当分禁足です。

丁度、牧水の一周忌にあたっていた。

牧水の没後、創作社の仕事から子育てに至るまで厳しい現実が夫人の肩にかかり、苦悩の日々が続いていたと思われる。

秋灯は、大正十五年から昭和三年までの牧水の日記に二十数回登場し、若山家の生活の中にごく自然に入っていた。

長女みさきさんは、『人間模様』の中で父と秋灯について「只、二人とも小柄で朴訥な容姿、身ごなしが、山歩きなど共にするのにまことに気兼ねなく呼吸が合ったことと察せられる。」と記しているほどだ。だから、喜志子夫人が秋灯を心から信頼し、親近感を寄せたのは自然であった。

ありし日の秋灯氏

昭和三年、牧水は秋灯を誘い、箱根・伊豆方面を歩いたが、裾野が出発点となり、牧水最後の旅となった。「長尾峠を歩きつつ、始終仰いで来た富士はやっぱりようござんした」と牧水。

背の富士をふり返りつゝ師と二人ゆったり登る長尾への道　　秋灯

秋灯は、平成五年九十四歳で亡くなるまで、生涯を通じ、人生の師として牧水に深い尊敬と敬愛の念を持ちつづけた。

椎の実が大好物であった牧水に、秋灯から

向ひなるお寺の杜の椎の木に時雨はふれど雪はいまだし

の歌をつけ、椎の実が送られてきた。

ふるさとの母にねだらむとおもひゐし椎の実をけふ友より貰ひぬ　　牧水

喜んだ牧水の詠んだ歌である。

うちわたすこの麦畑のゆたかなるさまをし見れば夏闌(た)けにけり　　牧水

うち渡す麦の畑と牧水が称へし裾野に今や麦畑はなし　　秋灯

牧水が愛した裾野の麦畑や桑畑が失われていく風景に、秋灯の静かな怒りが伝わってくるようだ。

師がねだる紺の脚絆を贈りしに旅には穿かで死の旅に穿く　　秋灯

当時、裾野に脚絆づくりの名手がいて牧水に贈った。一緒に旅に出る約束が牧水独りの死出の旅となり、秋灯の悲嘆が聞こえてくる。

牧水最後の旅姿

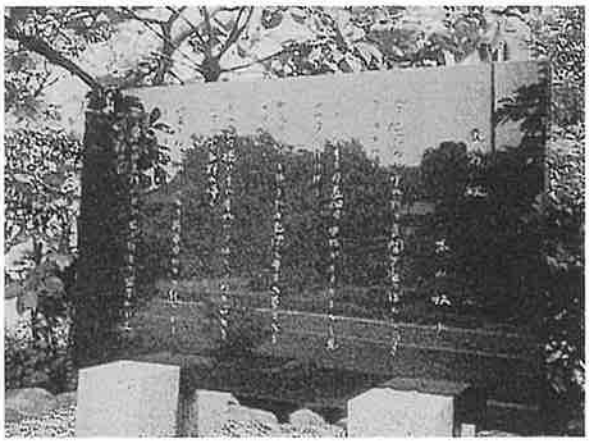
牧水と秋灯、二人の対話の世界は、師と弟子と云うより友情とも云える、なんともさわやかで楽しい世界をつくりだしていることだろう。

大正十四年牧水が秋灯宅を訪れた。

酒呑みつしみじみ語る師の目には涙さへ
見ゆ秋の雨の日

人間である故の寂寥感だろうか。

牧水が裾野を訪れたのは前後二十回をこえる。牧水がもう少し長生きをしたならば、裾野の住人になっていたかと思われるほどだ。



鈴木秋灯宅の「麦の秋」（『黒松』所収）の歌碑

裾野と牧水

「富士山そのものを歌った歌を作りたい」と牧水が初めて裾野を訪れたのは、大正九年十月のことでした。その年の八月沼津に引越してきた牧水は、毎日自宅の門辺に立って富士を眺めていましたが、やがて雄大な風景に魅せられて、裾野に足を運ぶようになります。

そんな牧水と鈴木秋灯さんの交流は、大正十二年『創作』の社友であった秋灯さんを歌会に誘ったことから始まりました。初対面の秋灯さんを自分の隣に坐らせ、話しかけてくれた牧水に、秋灯さんは親しみと尊敬を感じ、二人はすぐに意気投合します。

お互いの家を行き来したり、「草鞋をはかうではないか」という牧水の一言で、十里木から富士宮、箱根から熱海など幾度となく旅を共にしています。景ヶ島や五竜館の渓流など自然が大好きだった牧水は、美しい自然を見るとポロポロ涙を流して感動していたそうです。

こうして、人間牧水を身近に見つめた秋灯さんの手許には、牧水の手紙や遺墨、熱海の茶屋で焼いた菓子皿など、縁（ゆかり）の品々が残されました。現在、裾野市民文化センターの展示室には、秋灯さんから寄贈されたこれらの貴重な資料が展示されています。

また、中央公園から十里木の富士山資料館まで四つの牧水歌碑を結ぶ道は「牧水の道」と呼ばれ、各地の短歌会や読書会のグループなどが訪れています。

裾野市民文化センターの展示室

牧水さんの思い出

沼津牧水会会員　石井敏子

石井敏子さん

昭和二年、私は現在の本光寺の辺りに在った私立の沼津家政女学校へ入学致しました。仲良しの文学少女の古屋せいさんと毎月二十五日に出る少女倶楽部や少年倶楽部を買って、休み時間になるのを待って、みんなに囲まれて大きな声で読んだものです。

そのうちに、図画の白岩寛水先生に言付かって、はじめて松下の若山牧水さん宅へ額を届けることになりました。途中で、古屋せいさんと「何の絵だろうね。お得意の富士山かな」と言いながら、「一寸のぞいて見ようよ」と包んだ紙をめくって見ました。「ああ 矢張ほら 富士山だわ」と大笑いしながら大事にかかえて行きました。若山家の玄関先で「ごめん下さい、ごめん下さい」と大きな声で叫びつづけました。ようやく二十歳位の坊主頭の青年が出て見えたと思ったら、何も言わずにさっと額を取ると、奥へ引込んでしまいました。「何よ、あの人ったら」プンプンしながら学校へ戻り、寛水先生に届けた報告をしましたが、暫くの間あの書生さんの悪口を古屋さんと言って居りました。何十年も後になってそれが大悟法先生だったと分かりました。

大悟法利雄と牧水

今から十年位前の牧水祭の折、丁度大悟法先生とお近くの席になったことが有りました。あの時のお話をしましたら、「ああ、あの時、僕は怒ったんだよ。だって奥でハイ、ハイといくら返事をしても、聞いてもいないでチビが二人で歌でも唄っているように、ごめん下さいとさわいでいたんだもの」と大笑いしていらっしゃいました。「先生何十年も経っているのによく覚えていられましたね」と申しげたら、「おたがいに年とったね」と、又笑いましたっけ。

そのうちに、半月位過ぎて又届けるように云われました。今度は額ではなく、ボール紙にはさんで有ったので、かるくて途中かわるがわる持って行き、「今度は何の絵だろうね。見てみよう」と芝生へ置いてのぞいて見たら、「ああ又富士山だ。きっと牧水さん歌を書きそこなったのよね」と笑いながら行きました。今度は喜志子先生が出て来られて、「生徒さん御苦労さん」とねぎらって下さり、桃を二個ずつ頂きました。そういえば、あの頃、あの辺りは桃畠でした。私の学校の近くにもいっぱい桃畠がありました。

「牧水さんてどんな人だろうね。一度見度いね」少女の好奇心で、「松原を散歩していることが有ると云うからさがそうよ」と休み

時間に裏木戸を開けて松林へ出ました。

ある時、ようやく牧水さんの姿を見付けて、後からそぉっとつけて行きました。気になるらしく振り向いて、「オイオイ君たちけいこが有るんだろ、早く帰りなさい」と云われて、「折角さがしたのにね」と古屋さんとすごすご帰って来ました。

それでもこりずに、又何度も何度も行って、ある時「あっ牧水さん、何だかつまんでいるよ」と遠くから見付けて跳んで行きました。あの頃は松原の中はいろいろな木や草がいっぱいでした。牧水さんが口へ入れるのを見て、「これ何」とききました。「野ブドウだよ、これは藪グミだよ」と教えてくれました。「牧水さん、よく知っているねぇ」と子供心に感心しました。私たちもたべて見ようと口へ入れたけど、まずいの何の、ペッとはきだして笑われました。教室の後のドアをあけてそっと入って行くと、「又牧水さんをおいまわして来たのか」と兵学校出身の山出半次郎先生の大きな声。「誰かが先生に言付けたんだね」と後で古屋さんと話しました。今、明治史料館へ行くと飾ってある山出先生のお姿のお写真を見て、涙の出るほどなつかしゅうございます。

そんなある時、下本町に有った加藤と云う三味線屋さんの生家(いくえ)さんのお姉さんから手紙を頂きました。開けて見たら歌でした。

うす紅のはまなでしこに似し君と我は思いぬまでまみえねど

さァ、私は困っちゃいました。二日も三日も考えてそうだ、あのお姉さん美人だからと

白百合を師とも姉とも思いなしおしえを仰ぐ名も知らぬ草

と返事を出したことを、はずかしいけど牧水さんに話しました。「アアいいよ、ほら足もとに一ぱいうす紅のなでしこが咲いているじゃぁないか」と教えてくれました。あの頃は大きな根上りの松があちらこちらに有って、牧水さんは松の根方に腰かけ、古屋さんと私は芝生へ坐り込んでお話をききました。

時折旅行なさるので、「今度は長いね」と云っているうちに、亡くなったと伝えきき、エッと驚きました。寛水先生から「淋しいだろ」と云われて、古屋さんと手を取り合って泣きました。

翌四年、八角池の近くに大きな自然石の歌碑が出来て

幾山河こえさりゆかば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく

「とうとう牧水さん此の石になっちゃったのねぇ」と、刻った歌を小指でなぞって又泣きました。多感な少女の日の思い出です。

あれから七十余年経て、松原の中を、うす紅のなでしこをさがしても、根上りの松をさがしても見つかりません。本当に往事茫々の感のみ深うございます。幼い少女の心をあん

なに温く包んでよろこばせてくれた牧水さん。私は自分でも気が付かずにいましたが、喜志子先生、大悟法先生とお呼びするのに、牧水さんのことを先生とお呼びした事が有りません。時折の千本の散歩には先ず、幾山河の歌碑の前で「牧水さん来ましたよ」と申し上げます。すると「ああ来たか」と、あの、うるんだお声の返事が聞こえてきます。

文学少女の古屋さんも三人のお子さんを残して御主人に戦死され、大変な苦労の末に五十歳で亡くなりました。私も二十一年に上海から引揚げて来ましたが、十五歳の時に手に入れた牧水さんの小型の扇子をもんぺのポケットにそっと入れて持って来ました。

いかなればこひのはじめにかくばかりさびしきことをおもひたまふぞ

私の一生の宝でございます。

牧水さんのことを書いているこのそばで高校一年の孫の貴太がそっと紙切れをよこしました。見たら

牧水をかたる時の祖母の顔少女のようにかがやいている

と記してありました。「これからもまだまだ何十回も話して聞かせるよ」と笑いました。

「沼津牧水太鼓」が完成

牧水没後約四半世紀をへて、昭和二十九年に、喜志子夫人、長男旅人氏ら関係者約百人が参加して第一回沼津牧水祭が開催されました。第二十三回の碑前祭以来、芝酒盛での太鼓演奏が恒例になっていますが、以前から「沼津牧水祭のオリジナル曲を」という声が関係者の間で上がっていました。そして第四十七回の昨年、念願の『沼津牧水太鼓』が完成し、披露されました。

碑前祭を前に記念館前庭で披露された「牧水太鼓」

市内在住のはせみきた(本名長谷川知紀)さん作曲の『沼津牧水太鼓』は三部構成です。日本全国を歩いて旅した牧水の足跡を太鼓の音で辿るような第一部「健脚牧水」。「けふもまた心の鉦を打ちならし打ちならしつつあくがれて行く」の短歌からタイトルをとった第二部「心の鉦(かね)」。この歌は、牧水が今のはせさんと同じくらいの年齢のときに詠んだもので、はせさんはここに詠まれている心の情景に共感を覚えたそうです。太鼓に鉦が加わり、静かで単調な調べになっています。

第三部「碑前の宴(牧水太鼓)」では、「郷土沼津の素晴らしさを再確認し、新たな出会いの場を与えてくれた牧水に感謝しながら、大いに宴を楽しみたい」という作曲者の言葉通り、賑やかな太鼓の音が会場を盛り上げました。

今後、『沼津牧水太鼓』は毎年碑前祭で演奏されます。また、はせさんが立ち上げた芸能集団「ようそろ」のレパートリーとして各地で演奏されるそうです。会員の皆様も今年はぜひ、碑前祭会場で生の演奏をお楽しみください。

「全国牧水サミット」を迎えるまち

実行委員長
（哲西牧水顕彰会長）
羽場幹恵

幾山河こえさりゆかば寂しさのはてなむ
国ぞけふも旅ゆく

岡山県哲西町と広島県東城町の県境・二本松峠の旧街道に歌人若山牧水の歌碑が建ってから三十六年になります。

牧水は早稲田大学在学中の明治四十年七月二日、郷里宮崎への帰途、二本松峠の旅篭「熊谷屋」に一泊してこの歌を詠みました。

やがて、喜志子夫人と長男旅人氏の歌碑も二本松峠に建立され、全国でただ一箇所、親子三人の歌碑がこの地に寄り添うかのように建っています。

歌碑に隣接して、平成五年「熊谷屋」の復元が成り、平成十二年三月には待望の「牧水二本松公園」が完成いたしました。中央には木製の水上舞台、池の土手には藤棚と石楠花苑がしつらえられています。また牧水生誕地東郷町からは桜、牧水終焉地沼津市からは松の寄贈があり植樹されました。

この名歌誕生の地を誇りとし、文化の香り高い町づくりをという声のもと、県境の二本松峠でつながる東城と哲西の両町民は、手をたずさえて平成九年五月に牧水顕彰会を立ち上げました。そしてこの十月に、いよいよ全国の牧水ゆかりの地から関係の皆様方をお迎えするかと思うと今から胸が高鳴ります。

サミットは建設中の哲西町民総合センター（仮称）を会場に、本年十月二十七日の佐佐木幸綱、馬場あき子両先生の記念講演で開幕します。引き続き、フォーラムでは、東郷町・沼津市などの顕彰会代表五人がパネリストを務め、伊藤一彦先生のコーディネートで、各地の取り組みや今後の顕彰活動、まちづくりなどを語り合います。

その夜の歓迎レセプションは、両町の郷土芸能でもてなし、地酒で、こよなく酒を愛した牧水を偲びます。翌二十八日は、牧水二本松公園において、歌碑祭・短歌表彰（六月末締切全国公募）・街道祭・唄芝居「牧水」の公演などを行い、交流の輪を広げます。

唄芝居「牧水」一座は、小学生を含む両町民有志で平成八年に結成し、旅人氏を迎えて初舞台を踏み、すでに東郷町でも披露しております。今回、公園の水上舞台で自然をバックに演じるのは初の試みとなります。

牧水の名歌「幾山河」の生まれたこの豊かな自然や人情を、より大勢の皆さまに満喫していただきたいと願いながら、中国山地の真っ只中、備中と備後の国境の二本松峠で多数の方々のお越しを心からお待ちしています。

なお、短歌作品を募集しております。奮って応募してください。

第47回

沼津牧水祭

碑前祭・芝酒盛

十月十五日(日)　午前十一時

秋は沼津牧水祭の季節でもある。千本松原が年に一度賑う時でもある。

大正九年二月、土肥へ向かう船の中で、牧水にお茶を一服馳走したのが、初代東海庵青龍師である。現在、三代目の青龍師が幾山河の歌碑へ献茶を行い、碑前祭が始まる。これも縁である。

遠くは日向、東京、千葉など牧水ゆかりの地からの参加者もあって、約八百人が集まった。

千葉県多古町の暮坂会のみなさん

日向牧水顕彰会のみなさんと乾杯

詩吟の朗詠

斎藤衛沼津市長、長澤靖夫教育長の祝辞があり、榎本篁子牧水記念館館長の献花、献酒、挨拶と続いた。

中学生短歌コンクールでは、古屋千里君の「亡くなってやっと気づいた思い出はわずかににおう父のワイシャツ」など十首が選ばれ表彰された。

そして、『枯野の旅』の朗詠に合わせて花柳稔氏の舞踊。「牧水の歌を歌う会」の「うすべにに葉はいちはやく萌えいでて咲かむとすなり山桜花」などの歌声が松林の中へ響いていった。

渡辺酒造「牧水」の鏡割りの後、芝酒盛へと移った。詩吟が朗詠され、「ようそろ」の『沼津牧水太鼓』が初披露された。また「五竜太鼓」が力強く演奏され、芝生の上での酒宴は、にぎやかに続いた。

後日、日課となっている朝の散歩のとき、歌碑の前で立ち止まっていると、在りし日の上田治史氏、杉本達也氏、田中旭氏、佐藤英之助氏の姿が見えてきた。上田治史氏が車座になった中で、才気豊かに語っている。杉本達也氏がよく通る声で話をしている。また田中旭氏が瓢箪を片手に酒を注いで回っている。佐藤英之助氏がにこやかな顔で座している。みな笑顔を見せている。芝生の上での酒宴は、いつ果てるともなく続いていた。

冷たい風が私を現実にひきもどした。

それはまさに私の中のもうひとつの牧水祭、「風の牧水祭」であった。

これらの人達とは、牧水祭が、というより牧水が結び付けてくれた縁だと思う。

牧水祭碑前祭とは何かと考えたときに、天才歌人若山牧水を偲ぶということでもあるが、牧水が縁で結び付けられた人達を大切にし、そしておもてなしをすることでもあると考えている。それが、私達の文化なのだと思っている。

（沼津牧水会監事　鈴木弘行）

短歌大会

十月一日(日)
午前十時三十分
沼津市立図書館

前夜の雨が上がって心配した天気も上々の十月一日、沼津牧水祭短歌大会が行われた。今年は、『心の花』の佐佐木幸綱先生にお出でいただいて、午前一時間の講話と午後三時間にわたる歌評。切り口鋭いお話をじっくりと聞かせていただいた。

講話は牧水との関わりから話を始められて、牧水の若い頃の姿勢とその時代との関連など示唆されるところが多かった。特に、牧水の秀歌として以下の三首をあげられた。多くの歌人が牧水秀歌としてあげていない三首で、私も読み飛ばしていた歌だけに印象的であった。「こういう機会に三首覚えるといい」と言われた。その三首を紹介する。

忘却のかげかさびしきいちにんの人あり旅をながれ渡れる　（牧水の二十六歳の作品。小諸での作品の一つで、小諸の生活は牧水が自然に触れる最初の旅であったろう）

旅人のからだもいつか海となり五月の雨が降るよ港に　（牧水二十五歳。三浦岬での作品。明治四十五年四月十三日の啄木の死を看取った思いの延長かも知れない）

海鳥の風にさからふ一ならび一羽くづれてみなくづれたり　（三十七歳。静浦海岸での作。この鳥は鵜ではないか。どうともなれと言ったデカダンな調子に惹かれる）

教えられるところの多い講話であった。

選者佐佐木先生の選んだ上位三首

牧水賞第一席　三浦　征江
秋の夜に関節をほぐしながら聴くミスター・チルドレン　［Tomorrow never Knows］

牧水賞第二席　嵐田倭文子
曝されし褶曲地層の大うねり考古学者はいたく老いたり

牧水賞第三席　高橋　久代
吾にしめる君の重みが急速に軽くなりたる言葉わすれじ

互選の作品の上位を紹介する。

一位　藤井　初恵
触るること曽てなかりし君の手の麻痺せし方をせつせつと揉む

二位　小島たみ子
愛の文字一つとてなき君の文箪笥に秘めて古稀を迎える

三位　篠原千枝子
クレヨンをにぎりしままに寝ねし子の目のなき象に点の目を画く

佐佐木先生の批評は的確で納得させられることが多かった。時間をかけた前半のいささか脱線気味のお話が好評だった。「ものに沿って歌え、ものに語らせよ」が批評の中心であったかと思う。（沼津牧水会理事　須永秀生）

第13回 雛の歌会

第十三回雛の歌会は、平成十三年三月三日午後一時三十分から、沼津市若山牧水記念館で、講師に歌誌「濤声」主宰の温井松代先生をお迎えして開かれた。（詠草七十九首、出席者六十五名、司会須永秀生氏）

先生は、現代の短歌のありように触れ、どちらかと言えば伝統重視の側だが、「伝統を重

んずるあまり新しいものを拒否するということではなく、良いものは良いといった柔軟さを持って自分の方向を決めたいものである」と述べられ、それらのことを作品に触れながら話してゆきたいとして講評に入られた。

ひとつひとつの作品について、作者の思いを大切にしながら、共に推敲してゆくといった講評ぶりは具体的でわかりやすいものであった。

例えば、「常套句に逃げたり、説明過多などは迫ってくるものをうすめてしまう」「上句のびやかさが結句の暗い堅い表現で急に重くなり統一を欠く」「ひとつの語句の選びようで解釈が変わり、作者の本意が伝わらなくなる」「主観の入れすぎは、作品としての余情を欠き共感の域を出ないものとなるし、比喩は余程きちんと決まらないとむしろ陳腐なものとしてしまうおそれがある」そして「快く胸にひびくリズムが欲しい」などなど。

「今の世相の中に心の癒しをもとめた私の願望から発した選びようであったかもしれない」として次の五首を示された。

黄を好む夢二の千代紙売る店を尋ね歩きて夕べとなりぬ　田中　千代

鱗（うろこ）の生くるいのちを食む禽（とり）の白は冴えゆく夕べの川に　君山宇多子

くちびるのような月だと告げる子の瞳は冬の空を射とめる　小野さと子

み佛となりて幾年春の雪消残る愛鷹ふりかへり見つ　高木　絢子

「美しく老いるために」など言い来しが気はずかしくて　すずめいろどき　青木　朝子

他に注目した作品として次の作品をあげられた。

五十年へだたる愛子（まなこ）水仙の清きふくらみい抱きて来たる　渡辺たつ子

初節句迎える加奈子の正月を飾る羽子板背負い届けぬ　田中　雅子

会はざりし一年長し杖三人補聴器ひとり

われは目を病む　前田　鉄江

七日正月七草なづなてんてんてんどこも開かぬ灰色の空　鈴木　利子

そののち、問題歌となった作品について、作者のことばを聞いたり、いくつかの質疑応答もあったりした。

雛の日の午後の歌会は、終始なごやかなまま外の芝生にまだ明るさの残る四時三十分、なごりを惜しみながら散会となった。

（沼津牧水会理事　青木朝子）

文化講座

講　演
「日本の学問建設者　西　周」

日　　時：平成13年２月24日（土）
　　午後１時30分～午後４時
会　　場：記念館会議室
講　　師：四方一弥氏
参 加 者：30人

朗読とピアノ演奏
「ようこそ　おとぎのくにへ」

日　　時：平成13年２月10日（土）
　　午後６時30分～午後８時
会　　場：記念館ラウンジ
講　　師：朗読　伊藤弘子氏、ピアノ　寺舘利之輔氏
参 加 者：70人

牧水記念館短歌会

日　　時：平成12年４月～平成13年３月
　　第２土曜日
　　午後１時30分～午後４時
会　　場：記念館会議室
講　　師：須永秀生氏
参 加 者：延べ124人

初心者のための短歌講座

日　　時：平成12年４月～平成13年３月
　　第２土曜日
　　午前10時～12時
会　　場：記念館会議室
講　　師：須永秀生氏
参 加 者：延べ208人

サロン音楽の夕べ

第１回　『リコーダー音楽の愉しみ』

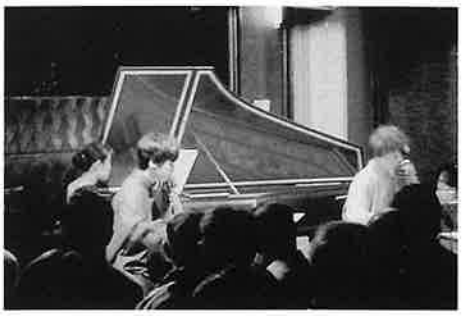
日　時：平成12年５月27日(土)
　　午後６時45分
会　場：記念館ラウンジ
出　演：矢沢千宜　武石富士雄
　　入川眞理（リコーダー）
　　西谷尚己（ヴィオラ・ダ・ガンバ）
　　杉山佳代（チェンバロ）
来場者：138人

第２回　『日本歌曲の冒険』

日　時：平成12年９月９日(土)　午後６時30分
会　場：記念館ラウンジ
出　演：鈴木千香子（歌唱）
　　飯島祐子（ピアノ）
　　港　大尋（ピアノ）
来場者：61人

第３回　『ウィーン ピアノ・デュオ』

日　時：平成12年10月18日(水)　午後６時30分
会　場：記念館ラウンジ
出　演：クトロヴァッツ兄弟（ピアノ）
来場者：49人



第４回　『ヴィオラ・ダ・ガンバ、リュート、チェンバロによる音楽の花束』

日　時：平成13年１月27日(土)　午後６時45分
会　場：記念館ラウンジ
出　演：坂本利文（ヴィオラ・ダ・ガンバ）
　　坂本龍右（リュート、ヴィオラ・ダ・ガンバ）
　　杉山佳代（チェンバロ）
来場者：121人

平成12年度事業報告

総　　会　第14回　　平成12年４月28日㈮午後６時～７時
理 事 会　第１回（通算77回）　12年４月９日㈰午後６時～７時30分
　　第２回（　〃　78回）　12年４月28日㈮午後６時30分～６時40分
　　第３回（　〃　79回）　12年７月９日㈰午後６時～７時
　　第４回（　〃　80回）　12月８月30日㈬午後６時～６時30分
　　第５回（　〃　81回）　12年12月３日㈰午後６時～７時
　　第６回（　〃　82回）　13年３月１日㈭午後６時～７時30分

館報発行
第25号　12年11月25日
第26号　13年３月15日
会報発行
第13号　12年６月１日

1　調査研究事業

(1)　日向牧水顕彰会交流会
　　期　　日：平成12年10月14日㈯
　　会　　場：沼津東急ホテル
　　参 加 者：18人

2　第47回沼津牧水祭の運営

(1)　短歌大会
　　日　　時：平成12年10月１日㈰　午前10時30分～午後４時
　　会　　場：沼津市立図書館　視聴覚ホール
　　講　　師：佐佐木幸綱氏
　　応募短歌：234首
　　参 加 者：145人

(2)　碑前祭・芝酒盛
　　日　　時：平成12年10月15日㈰　午前11時～午後２時
　　会　　場：千本浜公園　牧水歌碑前
　　参 加 者：約800人

3　文学講演講座の開催等

(1)　講　　演
　「日本の学問建設者　西　周」
　　日　　時：平成13年２月24日㈯　午後１時30分～午後４時
　　会　　場：記念館会議室
　　講　　師：四方一弥氏
　　参 加 者：30人

(2)　朗読とピアノ演奏
　「ようこそ　おとぎのくにへ」
　　日　　時：平成13年２月10日㈯　午後６時30分～午後８時
　　会　　場：記念館ラウンジ
　　講　　師：朗読　伊藤弘子氏、ピアノ　寺舘利之輔氏
　　参 加 者：70人

(3)　第13回「雛の歌会」
　　日　　時：平成13年３月３日㈯　午後１時30分～午後４時
　　会　　場：記念館会議室
　　講　　師：温井松代氏
　　応募短歌：79首
　　参 加 者：60人

(4)　初心者のための短歌講座
　　日　　時：平成12年４月～平成13年３月　第２土曜日　午前10時～12時
　　会　　場：記念館会議室
　　講　　師：須永秀生氏
　　参 加 者：延べ208人

(5)　牧水記念館短歌会
　　日　　時：平成12年４月～平成13年３月　第２土曜日　午後１時30分～４時
　　会　　場：記念館会議室
　　講　　師：須永秀生氏
　　参 加 者：延べ124人

(6)　第11回「中学生短歌コンクール」募集・表彰
　　募集期間：平成12年５月16日㈫～７月19日㈬
　　応募短歌：2,049首（14校　2,049人）
　　入選短歌：50首（50人）
　　選　　者：青木朝子、川口和子、須永秀生、杉山芳春、曽根耕一
　　表　　彰：平成12年10月15日㈰　沼津牧水祭碑前祭にて

4　音楽イベント　「サロン音楽の夕べ」　牧水記念館ラウンジ

社団法人沼津牧水会定款（抜粋）

第一条　この法人は、社団法人沼津牧水会という。

第二条　この法人は、事務所を静岡県沼津市千本郷林一九〇七番地の一一に置く。

第三条　この法人は、歌人若山牧水を顕彰し、文学的業績の研究を深め、短歌文学の普及を図り、もって、教育文化の振興に寄与することを目的とする。

第四条　この法人は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

(1) 歌人若山牧水に関する調査研究
(2) 沼津牧水祭（短歌大会及び碑前祭）の運営
(3) 文学講演会及び文学講座の開催
(4) 文学に関する各種出版物の刊行
(5) 沼津市若山牧水記念館の管理運営の受託
(6) その他前条の目的を達成するために必要な事業

第五条　この法人の会員は、次のとおりとする。

(1) 正会員　この法人の目的に賛同して入会した個人又は法人
(2) 賛助会員　この法人の事業を援助する個人又は法人
(3) 名誉会員　この法人に特に功労のあった者で、総会の議決をもって推薦された者

第六条　会員になろうとする者は、入会申込書を理事長に提出し、理事会の承認を受けなければならない。ただし、名誉会員に推薦された者は、入会の手続きを要せず、本人の承諾をもって会員となるものとする。

第七条　この法人の入会金は、次のとおりとする。

(1) 正会員　一〇、〇〇〇円
(2) 賛助会員　三〇、〇〇〇円以上

2　この法人の会費は、次のとおりとする。

(1) 正会員　年額　五、〇〇〇円
(2) 賛助会員　年額　一〇、〇〇〇円以上

〈理事長〉林　茂樹
〈副理事長〉杉山　光男　河本與司幸
〈理事〉浅井　治　保坂　輝夫　田中　和男　川口　和子
青木　朝子　須永　英男　金子　安夫　四方　一弥
八十濱俊一　杉山　芳春
〈監事〉杉山　重義　鈴木　弘行

編集後記

平成十二年八月から、㈳沼津牧水会事務局長として、勤務させていただいております。歴史と伝統のある記念館を預かるにしては、文学的素養に欠けていて力不足ではありますが、皆様のあたたかいご指導の程よろしくお願い申し上げます。（小出和夫）

短歌大会の講師をお願いした佐佐木先生には、牧水の旅が未だにどこかでつづいているような旅情あふれる玉稿を寄せていただきました。

それに関連して、裾野の芹沢充寛さんにも裾野と牧水についての原稿をお願いしたところ快く引き受けていただきました。牧水が泊まった清水館については、会報第七号で中尾勇先生に書いていただいております。あわせて再読していただけると、大変興味深いものになると思います。

石井敏子さんの扇子のお話も、以前会報第六号で中尾先生に書いていただきましたが、今回の会報では、石井さんご自身に語っていただきました。生前の牧水に会った貴重な体験談です。石井さんには、当時の資料を探すにあたり、同級生のみなさんや白岩先生のご遺族に会いに行っていただくなど、ご足労をおかけいたしました。

また、裾野市産業振興課、裾野市立鈴木図書館、裾野市立富士山資料館の皆様にご協力いただきました。ありがとうございます。

■社団法人 沼津牧水会 会報「幾山河」第14号 ■平成13年5月25日発行 ■編集・発行 社団法人 沼津牧水会
■〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 TEL〈0559〉62-0424 E-mail：bokusui@thn.ne.jp ■印刷 ㈱耕文社